

〔東雅^{十三}疏〕稻イ子^略○中 倭名鈔に^略○中 穗はホ、禾穀末也と註せしは、天神此國を呼び給ひて、千秋五百秋長瑞穗國ともたまひし事もあれば、太古の俗に穗を呼びてホと云ひしは、これを最とし秀となしぬる、美稱とこそ見えたれ、最の字讀てホといひ、秀の字讀てホツと云ひしが如き即此義也、

〔倭訓栞^{前編}二十八〕ほ○中 穗は火より轉せり、穗の出初る色皆赤し、稻穗を本とす、貫之集に、田まもる家はある所と見えたり、神代紀に穎をよむも同じ、江次第に苧本謂之稻切、穗謂之穎、本穎國司貯積之總名也と見えたり、

〔倭訓栞^{中編}二〕いなぼ 稻穗の義、神代記に穗一字もよめり、

〔日本書紀^二神代〕一書曰、略○中 天照大神手持寶鏡、授天忍穗耳尊、略○中 又勅曰、以吾高天原所御齋庭之穗、亦當御於吾兒、

〔日本書紀^{十五}顯宗〕白髮天皇二年十一月、播磨國司山部連先祖伊與來目部小楯、於赤石郡、親辨新嘗供物、^{一云、巡行郡縣、}適會縮見屯倉首縱賞新室、以夜繼晝、^{略○中}億計王起、儻既了、天皇次起、自整衣帶、爲室壽曰、略○中 出雲者新墾、新墾之十握稻之穗、於淺甕釀酒、美飲喫哉、^{略○下}

〔神宮雜例集^一〕一供奉始事

大同二年二月十日、大神宮司二宮禰宜等本記十四ヶ條内、朝夕御饌條云、皇大神宮倭姬命戴奉^天五十鈴宮^爾、令入坐々、鎮^理給時^爾、大若子命^乎、大神主^止、定給^天、其女子兄比女^乎、物忌定給^天、宮内^爾御饌殿^乎、造立^天、其殿^爾爲^天、拔穗田稻^乎、令拔穗^天、大物忌大宇禰奈共爲^天、令春炊供奉始^支、〔夫木和歌抄^{秋田}〕建長五年毎日一首中、民部卿爲家、風わたるの田のはつほのうちなびきをよぐにつけて秋ぞしらる、民部卿範光、

正治二年七月當座三百歌合

民部卿範光